

## パネルディスカッション

# 温泉マイスター、かかりつけ湯の今後の展開

コーディネーター	青山	茂氏	(株)シード取締役副社長
パネラー	高橋	誠氏	駒の湯源泉荘代表
	芹澤	ゆみか氏	富士コミュニティFM放送パーソナリティ
	青木	行雄氏	東部保健所衛生環境部長
	甘露寺	泰雄氏	(財)中央温泉研究所所長

司会 それでは第2部のパネルディスカッションを開催いたします。

コーディネーターを株式会社シード取締役副社長の青山さんをお願いしてございます。よろしくをお願いします。

青山 よろしくお願いいいたします。甘露寺先生のお話、本当に目からウロコのような話がたくさんでしたし、もう半世紀に温泉の分析につき合っただらということでも本当にすごいなと思います。レジオネラ菌の問題につきましても自分の入ってるお風呂を3週間ぐらいお湯を変えずにですか、そこまでやるのかというふうに思いましたけれども、本当にまあ何を聞いてもいろいろ飛び出してくるというような印象を受けまして、皆さんも本当に1部の講演をお聞きになっただけでもすばらしい、きょうは収穫になる日ではなかったかと思います。

それではこれから1時間ちょっとになるかと思いますが、温泉マイスター、それからかかりつけ湯の今後の展開ということで、パネルディスカッションを進めていきたいと思います。

それではパネリストの御紹介を最初に皆さんに御案内したいと思いますけれども、それぞれ温泉を活用した健康づくりということでは、旅館の経営者として、またそういった温泉を通じた地域づくり、まちづくりという中でも活躍していらっしゃいます、駒の湯源泉荘代表の高橋誠さんです。(拍手)

それから、林哲司さんという日本でも本当に代表的な作曲家の方が社長をなさってるという富士コミュニティFMのパーソナリティーで、実はこの方伊豆半島の温泉に関しましてはもう250カ所、温泉をですね、以前某局のラジオのパーソナリティーをやってらしたときにですね、レポ

ートをされてるという芹澤ゆみかさんです。（拍手）

それから温泉マイスターを主宰した側として、また地域の住民の皆様の健康づくりを進める行政サイドとして、東部保健所衛生環境部長の青木行雄さんです。（拍手）

それから、今御講演をいただいたばかりの甘露寺泰雄先生にもパネリストとして参加していただきます。（拍手）

冒頭、ファルマバレーセンターの植田副所長のお話にもございましたとおり、かかりつけ湯については、先日、日銀の静岡支店長もかかりつけ湯のPR効果で、そういった体に痛みを抱える方ですとか、あるいは若い女性に非常にPR効果が出てるのではないかというようなことが新聞に載っておりました。またかかりつけ湯のホームページが今年の7月に立ち上がりまして、きのうの段階で2万9,900幾つでしたので、今日3万アクセスを超えたと思いますし、甘露寺先生の1部の講演の中にもございましたけども、温泉というのはお湯だけではなくて、周辺環境ですとか、さまざまな刺激を受けて、それでまあ相対的に良くなっていくんだというようなお話と、かかりつけ湯が目指しているところですね、非常に重なるところがあったなと思います。また温泉マイスターに関しましても、やはり地域といいますかね、それからお湯のことをやはり生活レベルで一緒に考えていくということが非常に大事なんだというようなお話、1部で先生からいただきましたけれども、そういったこともやはり温泉マイスターの趣旨と重なってくるものもあるというような印象を受けました。

それでは早速まいりましょう。まず1巡目でございますけど、自己の活動を御紹介いただきながら、例えば高橋さんにしましても、かかりつけ湯に源泉荘が参加されていらっしゃるし、プラス、温泉マイスターに関しましても一応取得者でいらっしゃるというようなところからですね、今までの取り組みの成果と、それから今後のやはり展望ということがきょうのパネルディスカッションのテーマになっておりますので、それに向けての課題ですとか御意見等を伺いたいと思います。ではよろしく願いいたします。

高橋 今、御紹介いただきました、伊豆の国市の外れにあります駒の湯温泉の源泉荘の高橋でございます。すぐ近くには、いわゆる湯治場として有名な畑毛温泉という温泉場があるわけで、この地域は伝統的に温泉保養のお客が多くて、一般的にも湯治場と言われてるイメージを持っているところでございます。先進的な取り組みというよりは、伝統的に温泉と健康、あるいは温泉と保養というのを結びつけていた地域でございます。いわゆる伊豆の保養、療養温泉といたれば、畑毛温泉、駒の湯温泉だという位置づけでございます。

しかし、そういう位置づけの中にもありながらも、なかなか癒しのプログラム、健康づくりのプ

プログラムというものでは確立したものがなかったわけですが、これがシステム、あるいはプログラムとして立ち上がってきたきっかけは、伊豆新世紀創造祭でございます。その後、平成15年に「新たな湯治場づくり」、これは県の東部行政センターが行った事業ですが、それに参画させてもらいました。そのときに伊豆市、伊東市でもウエルネス事業に取り組み始め、このころから温泉でのウエルネス、温泉での癒しが注目をされてきたように思います。

そして同じ時期に同時進行で「かかりつけ湯」も動き出しておりました。やはり平成15年のあるシンポジウムで、がんセンターの山口先生からウエルネス構想の一環として「かかりつけ湯」の提案がございました。ウエルネスという言葉、癒しという言葉がよく使われていましたので、ウエルネスの風に乗って、時代の風に乗っていこうということで、新たな湯治場づくり事業もかかりつけ湯構想も、多少のハードルがあったものの現在があると思っております。

かかりつけ湯ということですが、温泉マイスターをお取りになった方の中には、かかりつけ湯という言葉、いまひとつピンとこない方もいらっしゃるのではないかと思います。そのかかりつけ湯については、従業員には自分の言葉で説明できるようにしていますが、一応のひな型がありますので、ちょっと読ませてもらいます。

「伊豆の旅館の中で温泉自慢、また癒しと健康づくりに積極的に取り組んでいる施設で、温泉を利用して、健康増進や癒しにつながる健康プログラム、あるいは健康に留意した食事、あるいは滞在的なプログラムを提供できるような旅館をかかりつけ湯という」と説明しています。

次に、かかりつけ湯の取り組みを少し紹介しなければならないと思います。伊豆市では「天城流の湯治」、熱海市ではエイミックという組織を、NPOですけども、中心にいろいろな活動をされていますが、単発的な取り組みに終わっておりまして、事業性の高い商品が出ていないのも事実でございます。しかし、温泉を利用した健康づくりにおいては、ホームラン、大ホームランをねらうのではなくて、渋くても構いませんので、こつこつと小さなヒットをつなげていくことが大切なんだろうなと思っております。そして、かかりつけ湯は伊豆半島全域の39施設で実施しているわけですから、エリアを超えた連携、あるいは施設の共有化ということが言われていますが、私自身39の施設を拝見させていただきまして、改めて伊豆の奥深さ、え、こんな施設もあるのかということを実感しております。

施設の共有化とか連携という前に、かかりつけ湯同士、もっともっとお互いの施設をよく知っておく必要がある。知らなければならないということ強く感じているところでございます。できればお互いの施設の見学ツアー会のようなものを立ち上げていって、かかりつけ湯の仲間同士ですから、特別に秘密を、あるいはノウハウをお互いに公開し合うということもしなければなら

ない。まずはお互いの施設を十分よく知り合うというところから始めないと、なかなか連携は難しいのではないかと考えております。ぜひ来年度はそうした事業にも取り組んでいけたらなと思っています。

そしてもう1つ、温泉マイスターですが、これはかかりつけ湯と連携することはとても大切であると思っています。どういうふうな形で連携したらいいかというのは、私なりの考えを説明させていただければと思います。

温泉マイスター、これは地域の住民の温泉への関心を高めていただくということについては非常に大事な役割ですし、温泉の情報の発信人となっていただきたいのですが、なかなか自信を持って人前で温泉の入浴の話とかお風呂の話というのは説明するというのは難しいということも聞いています。

私が考えてるのは、できれば温泉マイスターの講習に看護師さん、あるいは保健師さん、管理栄養士さん、ケアマネージャーさんのような、医療に関わってる方にぜひ参加をいただければと思います。医学的な基礎知識もありますし、栄養についての基礎知識もありますので、そういう方々が専門的な知識を活かした温泉マイスターになっていただければ、例えば旅館で宿泊ツアーを企画したときの講師になっていただけることもできますし、各地域の保健センターで実施している高齢者向けの健康講座のお話、あるいは温泉入浴講習会などを入浴体験をしながら実施できるのではないのでしょうか。専門知識を持った方にも温泉マイスターになっていただくことによって、かかりつけ湯の旅館と温泉マイスターとのコラボレーションが非常に現実味を帯びてくるのではないかと、こんなふうに考えております。

以上が私の思っている温泉マイスター、かかりつけ湯の課題であり、今後の展望であると考えております。

青山 ありがとうございます。

かかりつけ湯同士のネットワークといいますかね、その今後の発展系としての、お互いをもっとよく知って、お互いを信頼し合って、そしてソフトを交換し合っていこうというようなお話と、もう1つは、かかりつけ湯とマイスターが連携していくに当たって、やはり一段ハイレベルな温泉マイスターというのが必要になってくるんじゃないかと。それによってかかりつけ湯との具体的な連携というのが可能になっていこうというふうなお話をいただきました。

それでは芹澤さんはですね、250カ所ですか。温泉入られて、ラジオのパーソナリティーとして伊豆半島を走り回ってですね、そういう意味では本当にユーザー側として、かつ女性としてですね、かつ芹澤さんはかかりつけ湯のアドバイザーであって、温泉マイスターも受講されてると。

その両方の立場をお持ちなので、そういったところから御意見いただけますか。

芹澤 ではよろしく申し上げます。

私がラジオで5年間、毎週毎週伊豆の温泉に入り続けまして、その数は250以上になりました。まあ伊豆の温泉だけで250以上入っている人はそうそういないからあんなことを買っていたのか、かかりつけ湯モデル施設の選考にかかわらせていただいて、その後は今、アドバイザーなる立場で、何もアドバイスはしてないんですが、かかわらせていただいております。

私自身、温泉マイスター講座も受講いたしました。ですのでいろいろな立場からちょっときょうはお話をさせていただきたいと思います。もちろん1番は温泉好きの女性であるということでお話をさせていただきます。

まず温泉を紹介するマスコミの立場としてなんですが、250入っていると、大体伊豆の温泉というのが何となく共通点、違いとかいろいろ見えてくるんですが。やはり伊豆に入った上でほかの温泉地に行くと、伊豆の恵まれてる部分、環境の良さ、山があり海があり、山に泊まっても2、30分も車を走らせれば海にも行けて、山であっても新鮮な海の幸が食べられて、海に行っても山の幸も食べられて。こういうところはあんまりないんじゃないかなって思います。食事の素材の良さはすごくあります。ですから平均的に伊豆の旅館さんを評価したときに、恐らくすごく高い平均点になると思います。

でも、取材する立場として大変なことがあるんです。どこに行っても同じことを言われるんですね。お宅の御自慢のお料理は何でしょうかって言いますと、地元のおいしい魚をふんだんに使ったとか、どこに行っても同じだったんですね。お風呂についても、内風呂があって、そして露天があって、入れ替え制になってますので、幾つかの温泉を入れていただけます。これをラジオで説明するのがいかに苦しいか。本当に大変なことだったんですね。

でもお宿に関して言うならば、よく私、これだけお風呂に入ってますので、お勧めの温泉はどこですかっていういろんな方に聞かれるんですが、すべての人が満足する温泉というのはあり得ないと思うんですね。行く相手によっても異なってきますし、好きな景色も、海が好きであったり、山が好きであったり。お風呂も岩風呂が好きであったり、桧のお風呂が好きであったり。それからお食事も。いっぱい食べたい方もいれば、本当にお魚を食べたい方もいれば。ですからぜひ旅館さんにはこれから本当に思いきってターゲットを絞っていただきたいなと思います。切り捨てる場所は思い切って切り捨てて、欲しいお客さん、自分のところの得意技を見せられるお客さんをぜひターゲットにさせていただきたいなあと、まあ客の立場から言わせていただくと、まずそんなことを考えます。

そして250入っているうちに、やはり記憶に残る宿ってというのが幾つかあるんですが、それは後になってみますと、決してハード面の良さとか高級であったりとか、そういうことではないんですね。必ず後で思い出すのは、あそこのお宿でこんな方とこんな話をしたっていう、人が残ってききますので、これからの時代は、特に娯楽とかそういうものではない温泉が求められる。療養とか癒しを求められる。それを助けてくれるのが、やはりそこで働く人であると思いますので、どれだけ、かゆいところに手が届き、かゆくないところはかかない。そういう人材を育てられるかっていうのが温泉には重要になってくるんじゃないかなと思っております。それを助けてくれるのがやはり、ここで出てくるんですが、温泉マイスターの皆さんじゃないかなと思います。

ただ私も温泉マイスターを受けましたときに思いましたのが、旅館関係者等とっても温泉に詳しい方だけでなく、私のように温泉好きで、温泉の知識を増やしたいなということで温泉マイスターを受けられた方も多んじゃないでしょうか。私は完全にそうだったんですけども。そうなるあまりにもレベルが違うんですね。私と高橋さんが同じ講座を受けました。高橋さんはもう薬剤師さんであって、温泉のこと何でもわかる方です。私はただ単にいっぱい入ってるだけの人間です。それが同じ講義を聞いても感じるものが全く違いますので、やっぱりこれからは住民の皆さんの温泉マイスター講座、旅館さんの温泉マイスター講座、それから観光関係者のマイスター講座というふうに分けて、そして講座をやっていただくことによって、発信の場もそれぞれの場面で発信していただければ、温泉好きの皆さんは、ほかの市民の皆さん、町民の皆さんに、温泉とはこういう入り方をすればいいんだよ。近所のおばあちゃんに伝えていただければいいと思うんです。日帰り温泉に行ったときに隣りに入っている若い女性に教えてくださればいいと思う。旅館の方はお客様に教えていただけるように、より高度なものを習得していただければ、私たちが客として行った場合もまた満足度が全然変わってくると思いますね。

そしてかかりつけ湯としてなんですが、きょうも山口総長いらっしゃってますが、かかりつけのお医者さんがあるように、かかりつけの温泉があってもいいっていう感じですが、でも山口総長もおっしゃってるんですが、何も病人が行くだけがかかりつけ湯ではない。体が悪い人だけではなくて、私なんかもそうなんですが、日ごろ、ちょっと仕事が忙しくて、肩が凝っている。何かこう疲れがたまっている。そういう人が温泉に行って元気になって帰る。それもかかりつけ湯の役目であると思うんですね。ですからかかりつけ湯のモデル施設の皆さんには、もうちょっと肩の力を抜いて考えていただいて、幅広い意味で、来た人がちょっと元気になって帰れる施設を目指していただけたらなと思っています。

そして選考の段階で、とにかくいろいろなものを入れようというのを選考委員の先生方と話し

ました。高級なところもあれば、素泊まりのところもあり、自炊のところもあり、それからキャンプ場とかもあるんですね。だからお客さんにはその中から選んでもらえればいい。価格帯も何千円の世界から5万に近い、そういう旅館も入っています。だから、そこでまずお客さんに対しては選べる満足度があります。そしてお食事が得意なところもあれば、健康プログラムをもう何年も前から熱心に続けられてるところもあるので、それをどこにポイントを置いてかかりつけ湯に行くのかという、その選べる選択肢を、39施設を選定するときに考えて選定会議をしました。ですからそのかかりつけ湯モデル施設の皆さんには、自分の施設と同じようなところと提携するのも、それも1つだと思うんですが、同じ価格帯の旅館と。全く違うプログラムを持っているところほど、さっき高橋さんもおっしゃってましたが、知っていただいて、自分のところではこういうことを楽しんでください。でもこれは自分のところではできないので、じゃあ源泉荘さんに行ってくださいっていうような、横のつながりをぜひ持っていただきたいなと思っております。

そしてこのかかりつけ湯が立ち上がってから実際に何軒かプライベートで泊まっているんですが、実際に泊まった私に対して、かかりつけ湯とはこういうものですよという御説明は残念ながら一切ありませんでした。何よりも一番お金のかからない口コミの客というのは、実際にそこに泊まったお客さんだと思いますので、一度泊まった人には必ずかかりつけ湯という言葉、どんなものなのかを覚えて帰っていただくようにしていただきたい。そしてマイスターの皆さんは、一般の方より、温泉好きの皆さんよりいろいろもう勉強をされて、関心が高い皆さんですので、ぜひこれから、39施設ありますので、マイスターの皆さんがいろんなところに行っていて、そのかかりつけ湯の施設にぜひ御意見を言っていただけると、またどんどんどんどんその幅ってというのが広がっていくのかなと思っております。

青山 ありがとうございます。ちなみにきょう、この会場になってるサンバレー富士見さんもかかりつけ湯で、ここにかかりつけ湯のパンフレットがあるんですが、そこにとにかく自分のところの売りをですね、オンリーワンを表現してくれということでしたら、サンバレー富士見さんは「お宿まるまる美術館」、まあそこにも絵もありますし、入ってきたロビーにもありますし、館内じゅう絵がいっぱい、本物の絵がいっぱいなんですけど、名画がいっぱいですが。「お宿まるまる美術館、人と自然と源泉かけ流し」。ちなみに隣りにいらっしゃる源泉荘さん、高橋さんところですが、ここは「健康志向の宿、入浴セミナー、健康体操でリフレッシュ」と。それぞれ売りが全然違うんですが、これがある意味でお湯と、それからおもてなしにこだわりながら、それぞれ自分の持ち味というのをはっきり打ち出して、お客様に伝えていくというようなところが1つの基本的なスタンスになるかと思えます。

それでは青木さん、マイスターのほうを主宰されてきた側として、今高橋さんのほうからもいろいろ、ハイレベルのマイスターですとか、それから芹澤さんのほうからも、例えば講座を分けたらなどというお話もございましたけども、今までやられてきたその辺の成果、課題、そしてそういう今の御意見も加味しながらですね、御自身が考えられる今後の展望についてお聞かせいただけますか。

青木 私、保健所の青木でございます。保健所におきまして日ごろ、食品とか水、廃棄物、薬と、こういったものを担当しております。まあ行政薬剤師ってということから、薬についてあんまり知らないということでもって、通称は、まあヤクザ師と、こんなふうな、こう悪い言い方で呼ばれているわけでございます。

その私がこの席に座ったということでございますけども、なぜかといいますと、多分東部地域で推進しているファルマバレープロジェクトの推進スタッフの中に、薬剤師の方々が多く関わっている。また保健衛生に、私自身として長く従事してるといようなこと。それから今度の温泉マイスターについて受講したといような立場から、多分指名を受けたんだらうと、こういうふうに思っております。

まずマイスターの位置づけでございますけども、皆さんはどういう意識でもって参加したかということ全体の流れの中で話をしてみたいと思います。

まず静岡県ですが、今健康長寿日本一というものを目指して事業を展開しております。その中で、東部地域におきまして、ファルマバレープロジェクトを展開しておりますが、日本は現在、世界の平均寿命、また健康寿命も世界一と、こういうふうになっているわけで、言い換えますと静岡県が健康長寿世界一というものを民・産・学・官で連携して目標を達成しようではないかと、こういうふうなことを目標にしておるわけです。

まずファルマバレーですけども、皆さんいろいろな機会に既にお話をされて聞いていると思えますけども、東部地域をゾーン化しようということでございます。そのゾーン化というのは、ハードの部分としてがんセンターができたわけですけども、そのものを中心にしまして、先端医療、それから薬をつくること、それから研究開発と、こういったものを通じまして、新しい産業の創出を図っていくわけです。

ソフトとして、温泉を利用した健康産業の育成です。平成15年から今までにかけましては、温泉フォーラムとか温泉マイスター、ファルマバレーセンターのかかりつけ湯の指定と、こういったものを、ファルマバレーそのものではございませんけども、それに付随して事業をやってきたところです。



先ほどから温泉マイスターを分けたいとか、そういう話があったわけですが、受講者の内訳を分析をしてみますと、全体で260人で温泉とか旅館関係者というのが大体35%ぐらい。それから無職の方、主婦の方々を含めまして大体35%ぐらい。それからケアハウスとか老人クラブの方々、これが23名くらいですかね。あとは医療関係とか水泳指導員というようなことで10名くらいと。こういうふうな割合になっております。旅館関係の方々は、あくまでもやっぱり事業としてどういうふうに持ってくるかということが主体になるわけです。一方の無職の方々については、やっぱり教養とか、ある程度の専門性を持っていてこうというようなことでして、ちょっと立場が違うのかなあと、こういうふうに思っておるわけです。

それから、忘れてしまったかもしれませんが、内容としてどういうことをやってきたかということですが、健康の基礎知識というようなこと。それから温泉生理学ということ、入浴前後の留意点とか、それから温泉の常識、非常識というものを説明がされました。

その中で特に私のこころに残っていることは何かというと、入浴時の急死者、別に温泉とは言いませんけども、その方の急死者が全国で推定で1万4,000人、それくらいいるということで、交通事故よりよっぽど多いんだなあとということで、この部分において私どもが温泉をウエルネスというふうに考える上では、やっぱりある程度考えていかなければならないのかなと、こういうふうに思っているところです。

それから皆さん、いろいろな思いでもってこのマイスターを受けたわけですが、いずれにしても、自分を中心にしたこと、また他人、地域、こういったものに対して、温泉を使ったときに、温泉を使った健康増進のために何ができるかというふうには、私は積極性というものを感じているところでございます。いろいろ勉強なされたわけですが、その中で、多分こういうことかなというふうに思ってるんだけど、意見として本当に健康になるのかなというような素朴な疑問を持っていられる方も多いいのではないかなというふうに、こう思います。

それから、自分や自分の身の回りの人の温泉による健康維持と増進、それから治療の一助にしたいなというような意見、それから中には今までの長い人生で得た知識というものを外部に向かってやりたいよということ。それはまちづくりであり、かかりつけ温泉の場合には、それをどういうふうに育てていくかというようなことだと思います。それから温泉を主体にして他人、地域のためにどういうふうに貢献ができるかなというようなことを多分言われているんじゃないかなと。こういうふうなことを私は感じたところです。こういった点が、多分マイスターのこれからの進む道というふうに感じているところでございます。私個人としては、高齢社会になってますます予防医学というものが必要になるわけですから、そういった意味から温泉を利用していき

いということを考えているところでございます。以上です。

青山 はい、ありがとうございます。

甘露寺先生に、今、お三方に御発言いただきまして、まあ実際、伊豆の温泉旅館、ホテルも含んでですが、その中でお湯へのこだわりと、それからおもてなしを大切にする旅館で、1つのネットワークをつくっているかかりつけ湯。それから、よりハイレベルなことを目指す方もいらっしゃるし、また地域の一般住民として温泉についてさらに詳しくし、それを活用して、自分もそれに対して貢献したいと考える、まあそういった人づくりをやっている温泉マイスターですけども。そういった取り組みが今後さらにまあ発展して実を結ぶためには、どのようなことが大切になってくるか。先生も先ほど1部でも温泉を健康づくりと、健康増進という観点で論じてらっしゃいましたけども、そういったところから御意見がありますか。

甘露寺 はい、わかりました。

特別に僕自身は考えてきてないんですけども。さっきちょっと申し上げましたように、高齢者で元気な人がかかりつけのお医者さんがいるっていう、これが厚生労働省で書いてあるんですね。で、かかりつけのお医者さんだから、当然かかりつけの温泉っていうのも、これも健康として非常に重要であるというふうに僕は思います。それで僕自身はさっき言ったように、もちろんその湯治とか病人を治すということも重要なんだけど、人間の社会の中がある程度半病人化してる。そういったものを元に戻してやるんだ。温泉が持つてるその、いわゆる何ていうのかな。元に戻してやる力っていうのは、これが一番重要であるということなんですね。

それで、昔っから保養、休養、療養とこう言ってるんですね。温泉には保養と休養と療養の三養がある。それ以外には最近では保養、休養、療養だけじゃなくて、楽しむ、楽養っていうのを取り上げる石川先生って、これは芝浦工大の先生ですけども、その方が昔っから言っておられる。僕なんかでもですね、温泉行って、おおいよかったな。あそこ、もう一度行ってみようじゃないかっていうのが、やっぱり温泉地として非常に、僕なんかはいいんじゃないか。僕自身はあんまりその何ていうのかな、ベストテンとか日本一とかっていうのはあんまりこだわらない。もちろんあってもいいわけですけども、あんまりそのベストテンにはこだわらない。日本一とか何だかんだっていうのもあんまりこだわらない。それぞれの特長を生かした形ということが、非常に温泉地として重要である。

それから先ほど芹澤さんがおっしゃったんですけども、人との関係、人が残ってくるっていう、その温泉でですね、一番重要だっていうのは、食べ物であり建物でありサービスであり、さらに人間なんですね。そこを、こういう組織っていうのはうまく活用していくっていうことが1つ非

常に重要なんじゃないか。

それできょう、何かこう拝見したら、薬剤師が多いんですか。薬ってというのはですね、草を楽しむって書くんですよね。自然を楽しむということです。そこからがそもそもの発想なんですね。というふうに僕らは教わった。今は大分話が変わってるんだけど、そういう原点があるということですね。そういうこと。

それでもう1つ、先ほどもちょっとこれの前にちっちゃい会議があって、そこでちょっと申し上げたんですが、伊豆半島は先ほどおっしゃったように、特徴としては、何て言うのかな。うまく大消費地の近いところにあって、そして案外懐が深いようで、なおかつ簡単なんですね。コンパクトにやれるという、そういう非常にある意味では特徴があるわけです。なかなかその、奥地へ行っちゃうと、2時間も3時間もかかるっていうようなところは今は、かつてはそうだったけども、現在は少なくなってきた。しかもいろんな人が行っちゃったんだけど、非常におもしろい現象が起きてますね。

今、みんなその乳頭温泉郷とか鶴の湯とか草津とか、いろいろ行ってます。秘湯というところへみんな出掛けて、それがすばらしいとみんな言うんですね。確かに秘湯はいいんですけども、今年の冬、いろいろ事件がありまして、案外その安全性というような問題が、秘湯の場合はどうかっていうと、ちゃんと検討されてるのかということ、そこまで山の中の温泉なんかには、実は配慮がされてるわけではないんですね。そういう問題がある。

で、秘湯と関連して、実はですね、例えば伊豆半島だって有名なのが、一番有名なのが熱海温泉。これが今実はですね、人が行かないから若い人に秘湯化しちゃってるんですね。一番そのワーッと大勢行ったところが秘湯化してるんですね。知らないんですよ、熱海。伊東も知らないんですね。そういうところがあるんで、これはまた新しい展開として、そういう伊豆半島の手近な温泉というのは、そういった昔の秘湯というのになっている。

これ僕らがですね、実は観光開発とは随分、いろんな先生方から教わったときに、まあ都市計画とか観光開発の場合の基本的な考え方、理論としていろいろ教わったんですが、その開発されてない山の中ってというのは、そういったある意味では開発され尽くしたところであって、そこへ手を加えてはいけないんだと。千家（せんげ）先生という有名な方がおっしゃったんです。要するにみんな行かない山ん中、静かな山んの中ほど、それは要するに開発され尽くしたところなんだから、あまり手を加えちゃいけないんだと。逆に都会みたいなところは開発されちゃったと思ってるけど、それは案外未開発地なんだよと。そういうような感じですね、温泉も、今までもうみんなが行って僕もってこう行ったところを、これから新しい意味で見直していこうというの

が僕は1つあるような気がします。

そういう意味では、伊豆半島っていうのは非常にいろんなものがありまして、いろんな温泉がある。ないのもありますよ。伊豆半島で実は、放射能泉がないんですね、泉質では。あとは全部ある、大体ね。鉄泉も今なくなっちゃったかな。この近くの酸性の鉄泉というのが三島のところにあっただんですが、今あるかどうかわかりません。酸性性も実は少し変わった形になっちゃったんですが、そういった意味でですね、みんなが行っているんなところへ行って荒らしたような感じになっているところを、手直してというか、見直していくということも非常に重要なんじゃないか。

それからもう1つ重要なこと、今青木さんがおっしゃいました。そのね、お風呂の中で死んじゃう人が多いんですよ、実は。これも困ってるんですね。自動車事故で死ぬ死亡者が減ってるんだけど、入浴事故ってのが多くなってる。この中のかなりの部分が一人で入浴、要するに孤立化っていうんですか、人間も。そういうのが影響してるんじゃないかと言われてるんですね。それで今、住宅展示場なんか行くと、ひっくりかえればすぐわかるようにブザーが鳴りますとかなんだかんだと言ってるけども、一人しか住んでなきゃ、そんなことやったってだめなんですね。

ですからある意味ではですね、人を誘い出しているいろいろ動かして、この僕自身は、今やってる運動の中で非常に重要だと思うのは、いろんな人にいろんな面で参加していただいて広めていくっていうこと。それがまあ非常に非常に重要。それから案外開発されちゃって、あんなとこくだらないよなんて言われてたけども、そうじゃないんだと。温泉はそういうふうなところにやっぱり別な味が湧いてくんだということを常に持って、新しい展開をやってたほうがいいんじゃないかっていうのが、僕自身が考えたところなんです。

それからもう1つ、温泉のその効き目の問題でよく聞かれるんですけども、その温泉で、僕が薬学だから言うわけじゃないんですが、薬とは若干違うんですね、温泉の場合はね、人間に対する作用が。さっき言ったように、服用してどうのこうののではなくて、その温泉でまず自分が住んでるところからまず行って、ある程度遠隔効果って専門的に言うんですけども、そういった、まずそこへ行くっていうこと。そこである程度滞在する、そのいろんな雰囲気を楽しむ。そういういろんな要素が入ってきて温泉の効果っていうわけですね。ですから薬みたいに1錠ならばいいんだとか2錠ならばいいんだっていうんじゃないんですね。これが間違えられちゃってるんですよ。

例えばさっき言った加水っていうのも、水で薄めると効能が変わっちゃうって大先生が言うけど、そんなこと書いてないんですよ。水で薄めて効能が変わるのはね、その療養泉で言って

る基準がそれ以下になっちゃったときは問題だけど、それ以外は、例えば熱海の食塩泉なんかかなり濃いですから、2割や3割薄めたって別にそんなに変わるわけじゃないんですね。いわゆる定量的に人間に対する作用っていうのは必ずしもその定量的でない部分があるということね。定量的なんだけど、はっきり出てこない部分がある。こういうわけですね。

それでさっき言ったように、いろんな要素があるから、そういうことをやっぱり加味して、我々も温泉の効く、効かないっていう問題を考えていかなきゃいけない。僕自身はそういった形で、まあ先ほどいろいろ話しました。とにかくいわゆる正常化作用ってのが温泉が一番重要。乱れてるものをもとへ戻すんだ。その戻す内容ってのは、いわゆる神経系であるとか、それから内分泌系であるとか免疫系であるとか、そういったものをもとへ戻してあげる。そういう働きがあるんですね。それで、それはただお風呂入る。ただ温泉を飲む。それだけじゃない。その離れてるところからまず行って、そこでいろんなものに接して、いろんな刺激を受けるということが非常に重要なんですね。その刺激が常に新しいものでこう回転していくということが、非常に重要なんじゃないか。まあこういうことです。

青山 ありがとうございます。

そうしましたら今一巡してかかりつけ湯、それから温泉マイスターと話を伺いましたけれども、甘露寺先生がおっしゃいました、いろんな人に参加していただいて、そして温泉というものを学んでいただく、あるいは温泉というものを支えていただくというようなところが、まあ今後の、先ほど入浴中の急死者の問題も絡めてお話ございました。そう考えますと、一番最初に高橋さんがおっしゃったような、よりハイレベルなところを、より専門性といいますかね、追いかけて行って、そしてかかりつけ湯加盟施設等でそういったソフトを提供して、というような関わり方の方向へ行くのと、もう1つは、いい客がいい宿をつくるという言葉がありましたけど、逆に言うと、いい住民がいい地域をつくるといいますか、温泉を知っている、より知っている住民が多ければ多いほど、その温泉地はよくなるだろうというような、まあそれがまあある意味ウエルネスのまちづくりの1つになってくるかと思えますけど。いずれにしてもキーワードとして非常に人というのが温泉の中で非常に重要な要素として出てきたように思います。

高橋さん、それじゃもう1つの顔として、地域づくりにかかわるほかですね、例えば最近、構造設計での偽造が言われてますけど、温泉も以前、表示の問題とか、温泉の質などで偽装が行われましたが、それはまあ実際には心ない方々はもとより、逆に言いますと、そういったユーザー側とか住民側があまりにも自分の地域のその温泉とかそういったことに、あまりにも無関心でい過ぎたんじゃなからうかと。非常にやっぱりその辺のことは、ある意味では監視役と言っちゃ変

ですけれども、当然大切にするという、まあ認識が根底に欠けていたんじゃないかなと思う、私個人的にそう思ったりするところもあるんですけど、その辺、高橋さん、いかがでしょうか。

高橋 その問題については、我々宿泊産業側に多少問題があるのかなと思いますけれども。皆さんどうでしょうか。ここにいらっしゃるほとんどの方々は伊豆の地域の方ですけれども、地元の、例えば長岡の方が長岡の温泉によく入ってるよ、修善寺の方が修善寺の温泉によく入ってるよという方が果たして何割ぐらいいるのでしょうか。地元の方が地元のことを知らないということで、今、伊豆市ではそこを少し見直そうというわけで、各旅館がお互いの施設を見学というか、ちょっとのぞいてみませんかではないんですけども、見て回るとい事業を行っているようです。

皆さん、どうでしょう。地元のお風呂によく入るよという方、どのぐらいいらっしゃいます？はい、ありがとうございます。やっぱり1割から、多くて1割5分ぐらいでしょうか。地元のお風呂を利用してないというのはいろんな理由があると思うんですね。旅館側、施設の側が案外と敷居が高くて、地域の方とのあまり交流を持っていなかったことがあります。最近は旅館の敷居はかなり低くなってきたようですので、ぜひ私のほうから皆さんにお願いしたいのは、地元の温泉、いい温泉ばかりだと思いますので、ぜひ地元のお風呂にできるだけ、日常生活のレベルで温泉を利用していただきたいということです。

また、私も入浴セミナーでお湯の話をしているのですが、実はセミナーの内容はよく変わるんです。変わるというのは、お客様を見て、地元の方だったら地元の方に合わせ、また、温泉表示の問題があつてからは、そうした説明が中心になることもあります。数年前まではどういうふうにお風呂を利用するのが正しいんだという説明をしていたのですが、最近では安心して安全に入れる入浴についての説明中心に変わってきています。一人で入ると危ないとか、水分の補給が大事だとか、朝起き抜けの一番風呂が危ないというようなことです。

温泉マイスターには、地域の方がたくさん参加してくれているわけですので、ぜひ地元の温泉を大いに活用して、温泉マイスターの修了証がございますので、それを縮小コピーかIDカードにすることによって、気軽に旅館を見学できたり、源泉や温泉の機械室を見学できるようなシステムがあれば、温泉マイスターの活動が拡がり、温泉やお湯そのものへの関心も高くなるので、温泉利用の裾野というのは大いに広がってくるのだろうと思っています。

青山 ありがとうございます。

先ほど青木さんのお話にもありましたとおり、修了された方から、どういう活動をしたらいいのかというような、そういった意識が非常に高まっていて、そういった意味で非常にやはり前向きでアグレッシブな方が多いというお話ありましたけど、今、高橋さんのお話から、そういった

地域で活動していくに当たっての、具体的な1つのヒントがあったかと思います。

芹澤さんですね、今、地域の人のお話をしましたけど、温泉に250カ所行ったけどみんな話がほとんど一緒だったと。印象に残るところはどういうところかという、印象に残る話があった、というような話があったんですが、芹澤さんはプロの語り部ですよ。いかに相手に瞬時にして自分に興味を持ってもらって、興味のある話題を提供して、そして話を展開していくと。それで、宿泊施設の方にも、あるいは温泉マイスターの方も、今後、今高橋さんがおっしゃったようなことも含めて、いろんなものを伝えたりしていかなきゃいけない。そういった意味でやっぱり人と人との関係とか、非常に大きな要素になってきますが、その辺のプロとしてのノウハウについて、自分で投げかけた質問に自分で答えるということになりますけれども。

芹澤 はい、自分の首を締めました(笑)。私はラジオの番組でも初対面の方にインタビューするというのがほとんどなんですね。しゃべり手になりましたときに、上の者から言われたことは、話し上手になるには、まず聞き上手になれと言われました。なので、自分が話すことを常に常に考えるのではなくて、相手の話をとにかくよく聞いているうちに、次の質問というのは自然に相手の話している中にあるので、質問は勝手に浮かんできます。

ですから例えば客室係の方が玄関からお部屋まで御案内するときの、あのいやな空気、すごくいやなものですよね。何かお互いにこうギクシャクした、それを何か和める雰囲気に変えることはできないのかと思うんですが、それはやはり仲居さんが例えばこういうマイスター講座を受講して、自分の温泉に対する知識を増やすとか、相手のお客様がどこからいらっしゃる方なのか。その例えば住所がわかれば、その情報を前もって知るの、そんな難しいことではないですよ。その土地のことをちょっと自分の知ってることを御案内する間に投げかけてあげると、最初の会話っていうのがとてもスムーズに始まるので、そうするとお客さんとの距離感は一気に縮まると思いますので、それによってお客さんが、きょう泊まることで何を望んでるのかというのがだんだん見え隠れしてくると思うんですね。で、会話のチャンス、きっかけというのはいろいろあるかと思います。

やはり旅館さんに限らず、観光に携わる方をお願いしたいのは、最近、私はブログをやっているんですが、ものすごく伊豆に関する旅館とかの検索で私のところに飛んでくるんです。かかりつけ湯のアクセス数が3万件とかいう感じなんです、私はもう8万とか9万いってるんですね。個人の。実名も何も明かしてないんですが。それだけ伊豆に来る方というのは、旅館さんとか観光協会が出している、止まっているページではなく、そこに実際に行った人の生の声を欲しがっている、旅館の方も、例えば桜の咲く時期であれば、毎朝毎朝チェックしに行くとか、そし

てそのときに迎えるお客さんに対して、きょうはあのあたりがきれいに咲いてますよとか、常に自分の情報を更新していくことによって、会話っていうのもどんだんだんだんスムーズに生まれてくるのかなと思いますが、どうでしょうか。

青山 常に旬であれということですね。ありがとうございます。一応今日も、非常にこれも講座の一環みたいですが、コミュニケーション論みたいな話でございますが。

それでは先ほどですね、青木さん、予防医学でちょっと温泉というものを考えていきたいんだというような御発言がありましたけど、ちょっとその辺もうちょっと具体的にお話いただけますか。

青木 実は私3年ほど前に伊豆の保健所におりました。そのときに、西伊豆町の協力によりまして、まあ山口先生、ここにいるもんですからあれなんですけど、温泉が健康に効くとか効かないとかっていうふうに言うと、先生の意に反するかもしれませんが。そのときの調査結果を少しお話をさせていただきます。

場所は伊豆の方々もきているようすけれども、西伊豆町の大沢里おおそうりというところです。西伊豆町の市街地から大体8キロくらい入ったところです。そのところに2つの部落がありまして、大沢里地区の中に2つ部落があります。1つはですね、48年はずっと温泉が各戸に引かれており、砂利採取の補償として住民が得たところです。それからもう一方の部落は温泉の入っていない、こういうふうな2つの部落が同じ地区にあります。

私どもが健康についていいとか悪いとかっていうふうには比較する前提として、健康っていうのは皆さん御存じのとおり、食べ物とか、生活環境、それから生き甲斐とか、職業と、こういったものが非常に大きなファクターを占めているということは私も十分承知をしております。ですから、そういったファクターのリスクを出来るだけ少なくするような形でもって選んだのが、今言った大沢里の地域でございます。それで温泉が入っているのはねぎのはた祢宜畑部落です。それからもう1方が、ちょっと名前忘れましたが、その他部落として話を進めさせていただきます。

何をしたかといいますと、対象を70歳以上の方とし、大沢里には131人おります。それで温泉を日常利用している祢宜畑の方々には40人。70歳以上ですよ。それから温泉を使っていない方が91人と、こういうふうになってます。温泉の種類はですね、泉温が39度。ちょっと低いかなという感じがするんですけども。成分的にはピーエッチが高くてpHが8.7くらいです。この地域には国民宿舎もありますから、一般観光客もご利用されております。

皆さんが病気で病院等に受診しますと、皆様の支払い分を除いて保険としてレセプト請求というものをします。レセプトにはどういう病気か、主体がどういう病気か。それから受診や入院日



数、医療費はどれくらいかが記載されています。こういうものをレセプトと言うんですけども、それをですね、町の協力によりまして、調査資料にいたしました。そのレセプトですが、平成11年、12年、13年と、この3カ年のうちのですね、5月分をチェックさせてもらいました。この5月というのは、保険の統計資料は5月と決められているからです。したがってそれと合わすような形で持って、5月をやったということでございます。

それで、先ほど言ったとおり、レセプトには疾病分類というものがございます。どういう病気ですよというものが、保険の中に31種類が決められております。だから例えば循環系の私が病院に行ったときに、ドクターが医療費を請求するときに循環系ですよと。循環系でもって幾らですよというふうな請求がされるわけですけども。そういったものをチェックしたものです。その結果ですけども、1件当たりの医科医療費が、祢宜畑部落、温泉が入ってるとこは1ヶ月2万5,000くらいと。それでその他のところ、温泉入ってないところは2万4,800円くらいというようなことで、祢宜畑、ちょっと高いんですね。次に1件当たりの受診日数ですけども、祢宜畑は1.5日、その他のところは2.6日と、祢宜畑が大体42%くらい。50%よりちょっと欠けるくらい少ない。次に受診率、医者にかかる割合ですが、祢宜畑は92件です。その他の部落で122件ということで、祢宜畑が25%低いと、こういう数字でございます。

次に最終的に特に重要な比較になるわけですけども、1人当たりの医科医療費、それが1カ月にですね、祢宜畑が2万3,500円くらい。それからその他が3万200円くらいというようなことで、祢宜畑が明らかに22%くらい低くなってるわけです。

これはさっき言ったとおり、まあ健康の形成には地域とか食べ物とか生き甲斐とかこういうものがあるわけですけども。そういうものを念頭に、できるだけリスクを少なくしてやったときに、祢宜畑の医療費が22%少なかった。こういうことでございます。だからこれをですね、年間にしますと8万円くらい少ないわけです。それで多分静岡県の老人医療費、歯科を除いた医科医療費は、多分県下では50万くらいと思います。そうしますとその22%っていうと、年間で1人当たり11万円くらいになります。

ですからまちづくりのときに、温泉をいかに観光客を増やすかというふうな、頭に行きがちなんですけども、今言ったとおり、例えば祢宜畑については20%くらい、8万円、年間で安くなりますよというようなことであればですね、それを町として、一人8万円分をですね入浴させていただく旅館に補助するとか、各戸に温泉を引くというふうなことも1つの健康づくりというふうな考えているところでございます。

ちなみにですね、ここの伊豆の国市には70歳以上が6,200人くらいいます。それで老人医療費が

44.9億円。歯科を含んでいるので正確ではありませんが、まあ22%とすると10億近いぐらいのものが下がるということなんですね。で、ちょっとこうものすごく大ざっぱな比較なんですけども、およそ10億くらいということになると、この伊豆の地域、伊豆の国市には大小含めて133軒ぐらいの旅館があります。それを割ってみますと、一軒あたり大体700万くらいとなる。こういうふうな健康づくりが考えられるということですよ。

これは1つの考え方でございます。したがってこういったものが、私はですね、伊豆の国は補助金を出して、まあ町営の温泉に入るようなことにはなっていると思いますけども。もっともっと広め身近に、住民が決まった時間にホテルで温泉入浴が出来るというふうなことになるれば、もっと健康で、もっと医療費もずっと安くなるんじゃないかと、こういうふうに、まあ1つの考え方として持っているところでございます。

青山 ありがとうございます。では、それに対して甘露寺先生、お願いします。

甘露寺 大変うれしいお話を聞かせていただきました。いつもそう思うんですけども、実はですね、長生の秘訣、これはね、天海大僧正っていう有名な、寛永寺にまつわるですね、徳川初期の有名なお坊さんがいるんですね。106歳とか110歳とかいって。その方がこういうこと言ってるんです。「長命は粗食、正直、日湯、陀羅尼(だらに)折々御下風(ごけふ)遊ばさるべし」。粗食というのは、あんまりね、暴食してはいけませんよってね。正直っていうのはホリエモンみたいなことをやったらやっぱり寿命短いよ。それから日湯っていうのは、これいろいろ議論があるんですけども、恐らくお湯を使うということ。陀羅尼はお経をあげること、現代風には大きな声で歌う、カラオケ。それから折々御下風っていうのはおならしろっていうことですが、腹にためないでぱっと出せっていうことですね。そういうようなことを、もう大昔っから日本ではお風呂に入るっていうことに非常に1つのやはり健康志向というものを持ってたということで、僕はいつもこれを話題に取り上げるんです。

それで今お話を聞きましてね、そのデータはどっかへ報告になってますか。ぜひそれをですね、一般の方もちゃんとわかって、そういうような細かい、特にこの温泉県中の温泉県、こんな温泉県は日本でないわけですから、そこでぜひその辺のところをしっかりと認識していただいて、それでまた活用していただく。非常にいいお話を聞かせていただいた、そう思います。

青山 ありがとうございます。何か甘露寺先生もぴたっと最後決めていただいたという気がしますが。先ほどの1部でも先生が、自分がしゃべるよりみんなの話が聞きたいんだというお話がございましたけれども、時間ちょっと押してますけれども、会場からこの辺で御質問受けたいと思いますけれども。どなたかいらっしゃいますか。

会場発言 私、熱海から来ておりますが。かの有名な熱海でも温泉マイスターを利用してるなんていうところは、まあまずまずないわけですね。で、ですから皆さん、せっかく資格取ったり、いろいろ勉強したり、体験もしてるわけですから、できればですね、県なり各市町村における行政において、これを条例化してですね、何百人収容以上のところは、そういう人を置かなきゃならない。昔のような、その風呂番さんでなくてですね、もっと高度な知識を持った人がいるということが必要な時代が来たかと、健康を主体にする、まあ熱海なんかばかりだから、カジノをやりたいなんていうことを言ってますけども、そんなことは抜きにして、温泉をやっぱ健康に使うというような方向に持って行くには条例化して、皆さんが奮起して、年をとってもそれができるといようなことにしてもらいたいんですよね。いかがでしょうかね。

青山 条例化というお話ございましたけれども、趣旨としましてはやはりしっかりとこういった温泉を守る方々を配置するというのを義務づけるというか、そういったことになるかと思いますが、それも。それは青木さん、いかがですか。

青木 まあきつと難しいと、こういうふうに思います。ただ、私はせっかく皆さんがマイスターというものを取ったわけですから、それをぜひ生かしてもらいたいよということですが、どういふふうな生かし方があるかなということだと思います。

まず、かかりつけ湯の中でもってメニューを持ってる温泉があります。それを私たちマイスターがほとんど知らないんじゃないかなと、こういうふうに思います。ですからそのものをですね、そのメニューを、最低限、39ですから、その半分くらいは知っていこうよということでございます。そうすれば全体としてのよし悪しというものがわかり、本来のマイスターになれるんじゃないかなと思います。

私は理想としてはですね、今、ファルマバレーがこういうふうな形でもって指定をしているわけですけども、そうではなくて、私たちマイスターがNPOみたいな形にして、推薦をすると。こういう方法でもって自然を組み合わせると、こういう場が、コースがあるんですよと、そういう推薦をするコースというものをぜひつくるというふうなことのほうが先なのかなと、こういうふうに思います。

青山 マイスターを今後まあ経常的な活動をしていけるような、そういう組織化も含めてということですね。よろしいですか。じゃあもうお一方。

会場発言 最近マイナスイオンという言葉をよく、森林浴とか、あるいは滝に打たれるとそこでマイナスイオンが発生して非常に体にいいというお話を聞きます。そして温泉の成分を見ますと、マイナスイオン、プラスイオン、いわゆる陽イオン、陰イオンということでもって全部

出てまいります。私のところは下賀茂温泉なんですけども、非常にマイナスイオン濃度が高いということを言われます。そこでこの何かうまい利用する方法、どういうふうにご利用したらいいのか。そういうことなんですけども、いかがでしょうか。

青山 じゃ、これは甘露寺先生、お願いできますか。

甘露寺 その質問はいろんなところで受けまして困ってるんですけども。

実はですね、温泉の中にあるイオンというのは溶けて水のイオンでして、これはプラスとマイナスイオン同じなんです。それで空気中の環境の中で、そういったマイナスイオンは帯電した粒子状のもので、それが多いうってというのはこれは昔から研究がありまして、一番有名なのは、藤井先生っていうのが最近日本で言われたんですけども、要するに滝であるとか、お風呂もそうなんですけども、そういった水に打たれるようなところは割合マイナスイオンが多いんです。それでアルファ波とかベータ波の絡みから鎮静効果があるようです。昔、滝に打たれて坊さんが瞑想にふけたってというようなことも含めてですね、そういうことが言われてまして、非常にマイナスイオンを非常に温泉の特徴として宣伝してるところもあります。

私はそれを別に否定はしないんですけども、温泉の人間に対する働きっていうのは、そういう1つのものだけ取り上げて、それが一番いいよっていうんじゃないんです。いつも言われているんですけども、トータルとしての作用が大切で、マイナスイオンだけを取り上げるのは、それは構わないけども、それだけ取り上げている温泉でやるとですね、大分いかさまが出てくる可能性があるんです。そういう器具も売ってるんですよ。すごく。

僕なんかは、これは確かにその瞑想効果とかそういう鎮静効果等はあるけども、それがじゃあどんだけ温泉の効果をプラスしてどうなっているのかというのは今いろんな学会で取り上げてやってやってます、温泉気候物理学会でも。そういう成果を踏まえて、それである程度の結論が出るんで、現状では、何かすぐ飛びついちゃうんですよ。アガリスクっていうのと同じでね。何かいいっていうと全部それに追いついちゃう。そうじゃなくても僕らの考えは、地道なものなんです。地道なものの延長線的なものとしてを捉えていくっていうのが、まあこれ僕個人としてもそういう考えです。

ですから、あまりその何ていうのかな、つくってる人や何かは何かも全部いいって言うんですよ、それは。もうアガリスクのときもそうだったし、紅茶キノコもそうだしですね、もうそれはいっぱいあるんです。僕自身は、それはそれはそれでいいんですけども、もっと冷静に考えてほしい。

青山 はい、ありがとうございます。本日たまたま最前列に、かかりつけ湯の創案者でございま

す山口総長がいらっしゃってます。山口総長はかかりつけ湯プランを考えるときに、医療者の立場として、伊豆には癒しにつながるすべてがあるというようなことをおっしゃってましたけども、まあ何か一言、きょうのシンポジウムを踏まえましてよろしくお願いいたします。

県立がんセンター山口総長 御指名ですので一言。

突然変な話ですが、チェ・ジウっていう韓流の女優さん知っておられますかね。あの「冬のソナタ」でね、ヨン様の相手役をやった女優さんですね。で、チェ・ジウが実は一昨日、静岡がんセンターにお見えになったんですよ。がんになったわけじゃないんですね。テレビドラマのロケでお見えになったんですよ。それで、それを見てた職員は、やっぱり感動してましたね。この場面で泣くっていうときはね、本当にバーッと泣くんですって。大したもんだなあと言っていましたけれども、そのテレビドラマ、次回か次々回の「ロンド」っていう日曜日にやってる番組ですけどね。そこでその出てくるはずですから、もし見たら、あれはがんセンターだと思っていたんだけど。別に「ロンド」の宣伝で発言してるわけじゃないんですけど。できるだけがんセンターで、そういうことがあると受け入れるようにしているんですね。

それで、誰を考えてるかという、患者さんを考えておまして、ずっと入院をしている患者さんが、ずっと病気のことばかり考えてる、暗く。だけどちょっと気分を変えてあげるのに、まあお医者さんとか看護師が少し気分を変えましょうね、前向きにと言ってもね、なかなかそれはできない。言葉だけじゃあね。だけどきょう、お見舞いに来た方はね、「今、チェ・ジウ見てきたよ」とかね、そう言うと、一瞬でもそのこと忘れることができますよね。病気の。これが体、精神には非常にいい影響を与えます。

それで、このかかりつけ湯なり温泉は、温泉の体に対する効用はさっきから甘露寺先生がいるいるおっしゃってありましたけれども、私も直接病気を治せるとは思えないので、健康を害したらではなくてね、半病人の方はどうぞかかりつけ湯に、病気になったらがんセンターにと申し上げてるんですけども。まあがんじゃなければ別の病院ですけどね。そのような、一瞬気分を変えるだけでも体にはいい効果があるので、それをぜひ、特に首都圏の方などを中心に温泉に来ていただいて、気分を変えていただく。それが特に現代社会、非常にストレスの多い時代、それから高齢化社会、やっぱり年をとってくるといろんなことが煩わしくなってきたりしますから、そういう方にこう刺激になっていただくといいんだろうなと。そんなふうなことを思いながらつけた名前です。

もう1つ、その名前をつけたときに考えたのは、さっきから私はそのチェ・ジウの話を持ち出しながら、さりげなくがんセンター宣伝してるんですね。で、がんセンター忘れてもチェ・ジウ

の話、何か誰か言ってたよなあと。がんセンターの医者だったと。こんなふうなこう連想ゲームになるんだけど、温泉はいい、温泉はいいって、これ全国津々浦々言いますよね。けどそこにかかりつけ湯という言葉の前につけることで、何となく癒しにつながりそうな温泉だと。だからかかりつけという言葉とお湯という言葉が一語になっているので、連想ゲームで何となく体に良さそうなお湯という言葉が、多分連想していただけたらと思ったので、こういう名前をつけてあります。

かかりつけ湯の方々にはぜひお願いしたいのは、これからの時代、やはり単なる温泉では売れないので、特徴、ワンフリーズ・ポリテイクスっていうのは小泉首相の一言政治ですけども、今回かかりつけ湯もそのワンフリーズを大事にしていますが、まずはワンフリーズをしっかり持っていていただいた上で、やはりさっきちょっとお話ありましたけど、きょうは側で桜が咲いているとか、きょうは三分咲き、五分咲きっていう情報をしっかりお客さんに提供していったらいいような、ワンフリーズ・プラス、その周囲の非常に細かい情報をしっかり持つということが大変大切ではないか。

それから私はぜひマイスターの方々も含めてお願いしたいのは、どっかの旅館に泊まっても、旅館の建物はいいとか料理は素晴らしいとか景色はいいとかっていう話はたくさん聞くんですが、自分の温泉のお風呂のここがいいっていう話をちゃんと聞いた覚えはあんまりないんですね。難しいですよ。そのお湯はさっきからのお話のように、非常に難しいですよ。例えばがんセンターの屋上に、温泉じゃないけれどお風呂場をつくってあります。「展望風呂」と呼んでいます。富士山が見えるので「富士見の湯」と呼んでいます。これは体が死なないという不死身にかけてあります。で、例えば温度は39度で、この角度でここに座ると富士山が見えますよとか、この角度で何時頃に行くと夜景がきれいですよとかね。それから伊豆石でできてますよとか。私でさえもその自分の展望風呂についてそのぐらいのことはちゃんと申し上げられるます。やはり自分のお風呂、あるいは自分が慣れ親しんだお風呂のことを上手に説明できる。そういうことを上手に、原点に帰れということですが、その辺をこれからぜひ勉強していただけたらいいなと思います。ちょっと長くなって恐縮ですが、以上です。

青山 ありがとうございます。（拍手）

拍手が来たんで終わりたいと思いますけど。いずれにしましても高齢化という、今日何度も出てきた言葉ですが、60歳から80歳まで自由裁量時間、自分の自由に使える時間が約7万時間と言われてます。それはですね、22歳から60歳。要するに例えば大学卒業して就職して、平均就労時間が7万6,000時間と言われてます。ほぼ22歳から60歳まで頑張った時間に匹敵する時間が60歳か

ら80歳までである。そう考えますと、また、まだまだ皆さん元気に活躍していただいて、そういう場としてもマイスターというの当然あるわけですし、また外からいらっしゃる方々にしっかり御案内していただくような形でもって、地域の温泉にしっかり目を向けて、それを大切にしてい  
く。その上にかかりつけ湯という品質保証のブランドが乗ったときに、これは伊豆はどこよりも強くなります。ブランドというのは言ってみればそれを使う方々との信頼関係の再構築、構築です。信頼関係があってブランドが成り立つ。そしてそのブランドを支える温泉文化風土としての伊豆というのがある。それを支える温泉マイスターの方々。そしてかかりつけ湯と温泉マイスターをつなぐ、よりレベルアップした方向は、これから1つの課題として今日提示されたというふうにとどめておきたいと思います。

本日は長時間ありがとうございました。（拍手）